3a
810
大10

尋常小學

國語讀本

卷九

文部省

41356
教科書文庫
4
810
31-1921
20000
80490

資料室

尋常小學國語讀本

卷九

文部省

広島大学
教
80490
図書

32
810
大10

もくろく

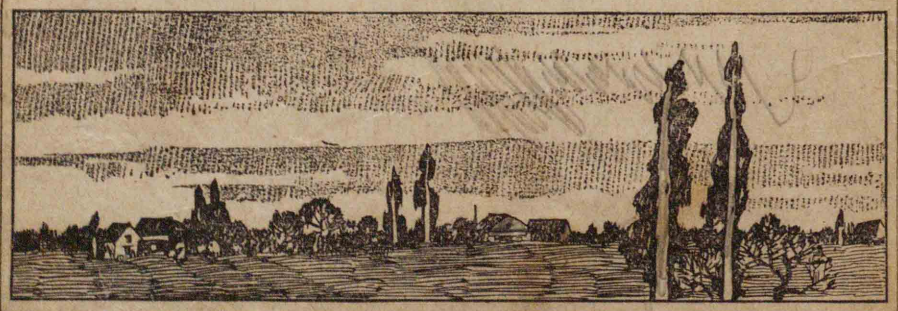
第一　今日……一
第二　トラック島便り……三
第三　弟橘媛……九
第四　養雞……十一
第五　動物ノ色ト形……十五
第六　五代の苦心……二十一
第七　ナイヤガラの瀧……二十九
第八　若葉の山道……三十一
第九　兩將軍の握手……三十六
第十　水師營の會見……三十九
第十一　物ノ價……四十三
第十二　弟から兄へ……四十六
第十三　老社長……四十九
第十四　麥打……五十六
第十五　軍艦生活の朝……六十
第十六　東京から青森まで……六十七
第十七　いもほり……七十七
第十八　石安工場……八十
第十九　星の話……八十四
第二十　白馬岳……九十三
第二十一　初秋……九十九
第二十二　北風號……百二
第二十三　手紙……百一
第二十四　水兵の母……百十四
第二十五　選擧ノ日……百十九

古

第一　今日

ふけ行く夜のしづけさよ。
あらゆるものはやみといふ
黑きとばりにおほはれて、
安き眠に入れるなり。

ひとり目ざむる古時計。
夜をいましむる夜まはりの
拍子木のごと、かちくと
さびしく時をきざみ行く。

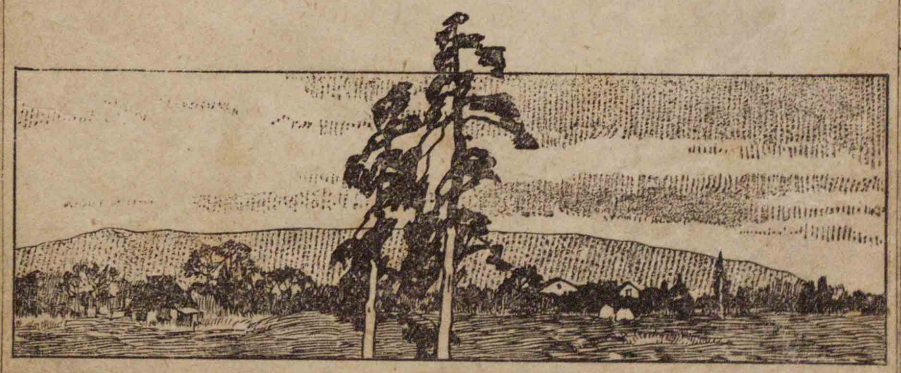


雞

業

きざみ〳〵て、明方の
雞鳴けば、夜のとばり
しづかにあきて、ほのぐと
東の窓はしらみたり。

よき日は明けぬ、さわやかに。
朝日は出でぬ、花やかに。
いざ、起出でて、勇ましく
我もはげまん、今日の業。



廻

島

土

第二　トラック島便り

三月二十五日お出しのお手紙を昨日受取りました。おとうさんはじめ皆様お元氣で何よりです。叔父さんも相かはらず丈夫で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

此のトラック島へ來てからもう三月になるので、土地の様子も一通りはわかりました。冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。暑さも年中此のく

邊(辺)
帶
屬(属)
移

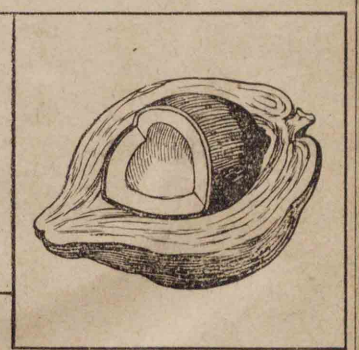
らゐのものださうで、かねて思つてゐたとは違ひ、なかく住みよいところのやうです。それに此の邊一帶の島々は我が國の支配に屬してゐるので、内地から移つて來た人も多く、少しもさびしくはありません。

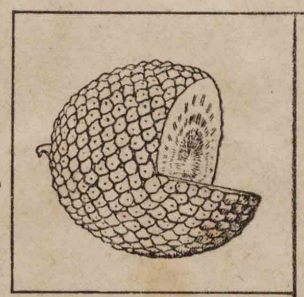
内地から來て先づ目

殊
幹
肉
油

につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのはコヽ椰子(やし)の木やパンの木などです。コヽ椰子は、高いのは十四五間もあります。鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上方に集つてついてをり、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がすゞなりになつてゐます。實の中にはかたい殼(から)があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。これから椰子油を取り、石鹼(けんらふそく)・蠟燭などを造るのださうです。まだ十分にじ

食





ゆくしてゐない實は、中にきれいな水がありますこれがなかなかうまいもので、私たちもよく取つて飲みます。又パンの木も所々に美しい林をつくつてゐます。其の實は土人の一番大事な食料で、燒いて食べたり、餅にして食べたりします。味はまことにあつさりしたものです。

茂　乏　飲

珍しい植物は此の外にもまだたくさんあります。これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる樣子は實に見事です。殊に毎日のやうに降るにはか雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、何ともたとへやうのない、氣持のよいものです。水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。

海の中もなかなかきれいです。水のすん

静　底　紫　群　性

でゐる事はかくべつで、波の静かな所でふなばたからのぞいて見ると、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。何だかおとぎばなしの世界にでもまよひこんだやうです。

土人はまだよく開けてゐませんが、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、殊に近年我が國で學校をそこ〻に立てたので、子供等はなかく上手に日本語を話します。此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

供　便　勅　亡

いづれ又近い中に便りをしませう。おとうさんやおかあさんによろしく。

四月十日　叔父から

松太郎殿

第三　弟橘媛

景行天皇の皇子日本武尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じて、東國の方に下り給ひき。駿河の賊を亡し

既俄荒　危

給ひし後、相模の國より上總の國へこえんとて、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。

既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。其の時、御供にしたがひ給へる弟橘媛、尊の御身危しと見給ひ、

「これ海神のたゝり

敷皮　重

ならん。われ皇子の御身代りとなりて海に入り、神の御心をなだむべし。皇子は勅命を果して、めでたく都に歸り給へ」。

といひて、菅筵八枚、敷皮八枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。

ふしぎや、今まで荒れに荒れゐたる大海、おのづから靜まりて、おだやかなる凪となり、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。

第四　養雞

朝早く起きて、井戸端に出づ。井戸に近き柿の木の、

日ましにのびゆく若芽のうす緑、見るに氣持よし。顔を洗ひをはりて、いつもの如く、庭のすみなるとやの戸を開く。待ちかねたる雞ども、我先にと走り出づ。中に入りてひよこの箱をかゝへ出し、軒下なるかこひの中にひよこを放つ。綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝ、ちよこ〳〵とかけ廻る。

妹は餌箱を持ちて、とやの前に來る。親どりどもすぐに見つけて、其の足もとにむらがる。妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりにまきちらせば、雞はあわてて其の方へ行く。白黒うすかば色、十幾羽の雞一つにかたまり、頭と頭とをつき合はせて、いそがしげに餌を拾ふ。妹はやがてかこひ近く歩みよれば、中なるひよこどもは小さき口を開きて、ぴよ〳〵と鳴きつゝ、かこひぎはに集る。毎日世話し居ることとていづれの雞も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。妹も同じ心にや、しばし見とれてひよこのそばをはなれず。

物置の前なるあき箱より、しゞみの殼を取出し、細

雞

かに打ちくだく。其の音を聞きつけてかけ來り、飛びちりたる貝のかけを、すばやくついばみたるは眞白なるめんどりなり。くだきたる貝殼を器に入れてあたふるに、これには餌の時のやうに集らず。とやの内に入りて見るに、敷藁の中に見事なる卵二つころがれり。昨日の午後に産みたるなるべし。妹の置きて行きたる餌箱に入れて持歸り、茶の間の戸棚の中にしまふ。机の引出より養雞日記を出し、「四月二十五日朝、卵二つ」と記入す。父上の命にて、養雞は今年より僕等の仕事となり、日記をも渡さ

色

れたれば、雞の事は總べて之に記入し置くなり。朝飯を終へて、妹と共に學校に行く。出がけにとやの方を見れば、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあさるにいそがしく、をんどりは箱のふちをふまへて、首をする、むねを張り、今やときをつくらんとする樣なり。

第五　動物ノ色ト形

多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ〳〵珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テヰルコトデアル。コ

保護容易

ンナ體色ヲ保護色トイフ。保護色ヲモツテヰルト、マハリノ色ニマギレテ、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、

都合

又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアル。

例蝶菜根

保護色ノ例ハイクラモアル。田ニ住ム土蛙ハ土色、木ノ葉ニ宿ル雨蛙ハ緑色。黄色ナ蝶ハ菜ノ花ニムラガリ、白イ蝶ハ大根ノ花ニ集ル。沙漠（サバク）地方ニ居ルラクダハ灰色デ、雪ノ中ニ住ム北極熊（ホクキヨクグマ）ハ眞白デアル。

雷枯

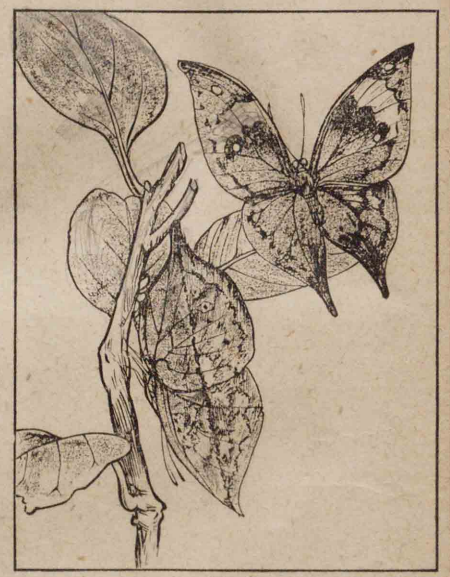
例

保護色ヲモツテヰルモノノ中ニハ、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色（カツシヨク）デ、枯葉ヤ土ノ色ニ似テヰルガ、冬ニナツテ雪ガ降リツモルト、眞白ニナル。又季節ニヨツテカハルクラヰデナク、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。例ヘバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ緑色デアルガ、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。

姿端

保護色ヲモツテヰル上ニ、其ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハリノ物ニ似テ見エルモノモアル。桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テヰルバカリデナク、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、體ヲナヽメニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデヰルノハ、農夫ナドガ小枝ト見違ヘテ、ドビンヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。又沖縄ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ

裏掛



表ノ方ニハ美シイ色ドリガアルガ、裏ハ枯葉ニ似テヰルノデ、羽ヲトヂテサカサニ草木ノ枝ニ止ツテヰルトマルデ枯葉ガ引掛ツテヰルヤウニ見エル。シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出來テヰルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。此ノ蟲ハ主ニ蘭(ラン)ニ止

反鮮器　警戒蜂

ツテ牛テ、外ノ蟲ヲトツテ食フモノデアルガ、羽ヲ廣ゲテ牛ルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカ〳〵見分ケガツカナイサウデアル。

又或動物ハ保護色トハ反對ニ、マハリノ物トマギレナイヤウナ鮮カナ體色ヲモツテ牛ル。コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテ牛ルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、之ニ近ヅカウトスルモノガナイカラ、ダヤスク見トメラレル方ガカヘツテ安全ナノデアル。此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。例ヘバ毒ヲモツテ牛ル蜂ノ體色ガ黄ト黑

臭　病

ノダンダラニナツテヲヲリ、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調ベテミルト、コノヤウニイロ〳〵フシギナ事ガアル。ホンタウニ面白イデハナイカ。

第六　五代の苦心

病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。少年はひざに兩手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。

福修志研究

まくらもとに置いてある行燈の光はうす暗く、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたはたとあふる。

「これまでも折々話した通り、四代前の歡庵様が、國利民福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、始めて農學をお修めになり、りつぱな書物もお書きになつた。それから元庵様不昧軒様、二代つゞいて、其のお志をおつぎになり、一そう研究を進められた。しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、四十餘年の間、寢食を忘れて其の道の書物を讀み、國々の實地を調べ、本もあらはし、出來るだけは骨折つたつもりである。しかし思ふ程に仕事は出來ず、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、役人ににくまれて、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。それから諸國を歩き廻つたすゑ、あの毎日見舞に來てくれる門人たち

寢讀政終

に頼まれて、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山を開いたりする爲に、此の山中へ來たのである。しかし此の分では、わたしの命は、とても仕事の出來上るまでもつまいと思ふ。」

老人は大分つかれたやうである。少年はてつびんの湯をついで老人にすゝめた。老人は一口飲んで横になつた。

少したつて、今度は寢たまゝぽつ〳〵と話し出した。

「歡庵樣は佐藤の家の農學の本をお開きなされ、

元庵樣はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、おぢい樣の不昧軒樣はまた、地質や鑛物の方で新しい發見をなされた。此の方々のお書きになつたものは、大てい此所に持つてゐる。其の本については、後に又言聞かせるが、大體一身一家の爲でなく、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ

精進　旅別

事で、これが佐藤の家の學問の精神である。わたしも此の精神にもとづいて、主に海産物や水利の事を調べて、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろ〳〵の差支があつて、實行が出來ずにしまつた。これはまことに殘念な事である。しかしわたしの四十年の骨折は、農學の進歩の爲には決してむだでなかつたと思ふ。

此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのがお前の役目だ。十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕とげてもらひたい。それにはわたしが死んでも國へ歸らずに、すぐに江戸へ出て、りつぱな學者を先生にして、一心に學問をはげむがよい。古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。」

目に涙を一ぱいためて聞いてゐた少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。父は安心した様子で、やがてすや〳〵と眠つた。

これは今から百三十年ばかり前に、下野（しもつけ）の國足尾

形葬　富開

山中の旅人宿で起つた事で、此の老人こそは出羽の國の醫者佐藤信季、少年は其の子信淵である。信季は其の後幾日かたつて、とうく此の宿でなくなつた。信淵は父の門人たちの情で、形ばかりの葬式をすますと、間もなく江戸へ出て、宇田川玄隨・大槻玄澤などの人々をたよつて、一心に西洋の學問を勉強した。さうして終に當代第一の農學の大家となつて、國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。

歡庵以來代々力をつくして來た農學は、信季の望

瀧　境　壯觀　盛波紋

通り、信淵に至つて大成したのである。

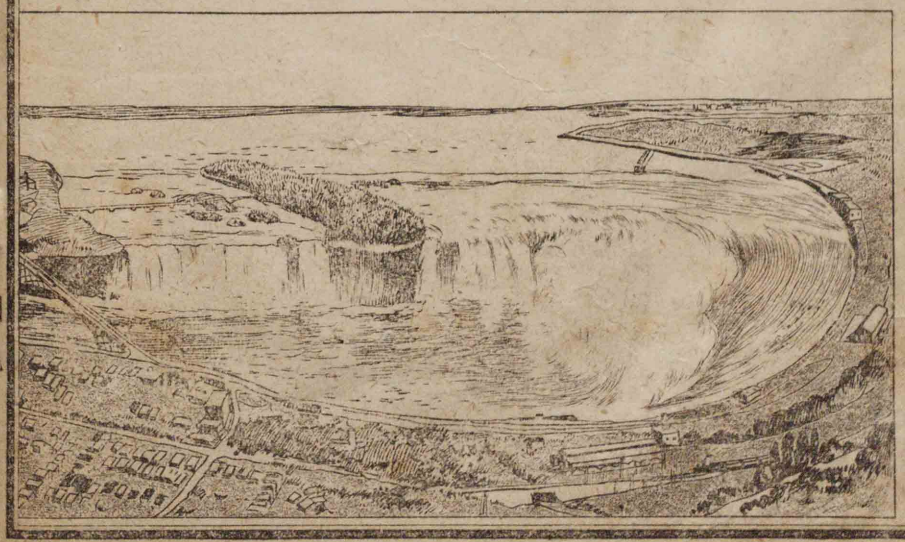
第七　ナイヤガラの瀧

世界一といはれるナイヤガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。廣さが千數百方里もある、海のやうな湖から流れる大きな河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、其の壯觀はとても筆や口にはつくされません。物すごいひびきは萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。

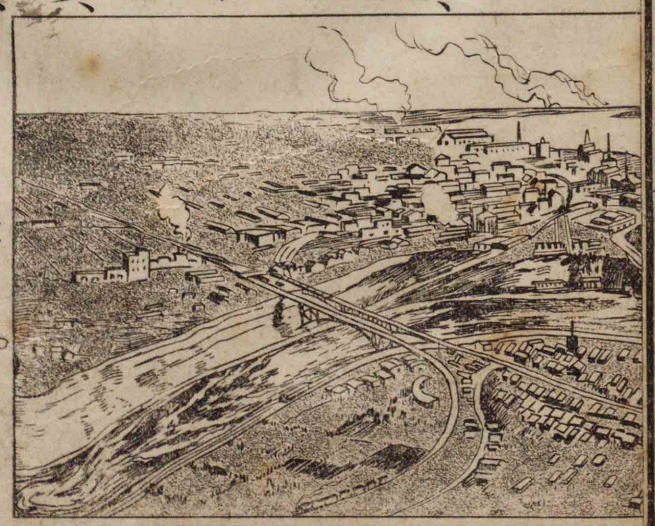
瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つ

に分れてゐます。右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラの瀧といふのです。瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、高さはどちらも十五六丈あります。

瀧の上手にかけた石橋を渡り、木立の深いゴート島に行



つて、もう〳〵と立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、下手へ廻つて、カナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白い。殊に遊覽船に乘つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つぼを見物して廻るのは、實に壯快です。



第八　若葉の山道

だら〳〵坂を登りきると、道は低いみねづたひに

なる。何時もはうす暗い程茂り合つてゐる兩がはの木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい。其所の木のかげ、此所の石のそばには、やぶかうじの赤い實に並んで、春蘭（しゅんらん）のつぼみのふくらんだのも見える。しつとりとしめりを帶びた一すぢの道が、足もとからうねくゝとつゞいて、やがて茂みの中にかくれてしまふ。

「もう一息だ。」さう思ひながら足を早める。かんくゝとこずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、手もうす緑、足もうす緑、

音

帶も着物も皆うす緑。あたりの空氣までが何となくぼうつとして、ふろしき包をしよつたせなかがじつとりと汗（あせ）ばんで來る。

目じるしの大けやきの所まで來た時、急にかん高い音を立てて、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。すると木のうろから、栗鼠（りす）が一匹、けろりとした顔を出したが、僕の姿を見ると、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまつた。

道がだんくゝ上りになつたと見えて、谷のこずゑごしに、遠い湖がちらくゝと見えて來た。空ははて

もなくすんで、所々にちぎれ雲が飛んでゐる。みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。道端の切りかぶに腰かけて、ひたひの汗をふいてゐると、そよ〳〵と吹く風につれて、若葉のにほひがひし〳〵と身にせまつて來る。うす紅のかへで、銀ねずみ色の楢、黄の勝つた緑のけやき、どの木を見てもなつかしい。

「此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。」と、此の前來た時の事を考へながら、出後れのわらびを一本折つて、又歩き出す。腹が大分すいて來た。もうお晝頃だらう。

やうやく清水まで來て、手の切れるやうにつめたいのを二三ばいつゞけ樣に飲んでゐると、大きな青大將が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろのろと草の中にかくれて行く。それをじつと見送つてゐると、

「やあ、加藤君、よく來てくれたね。」

と、聲をかけた者がある。頭を上げてみると、それは石井君であつた。

石井

卒　正情防破

第九　兩將軍の握手

リエージュの要塞に立てこもりたるベルギーの勇將レマンは、部下の將卒をはげまし〳〵、エンミッヒ將軍のひきゐたるドイツの大軍を物ともせず、勇ましく防ぎ戰ひたり。されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戰も、終に如何ともしがたく、要塞は全く破くわいせられ、將卒は多く戰死せり。

レマン將軍も、火藥の爆發によりて起れるガスの

息　握

エンミッヒ

レマン

爲に窒息し居たるを、ドイツ兵に發見せられて、野戰病院に送られたり。

後日レマン將軍が捕虜としてエンミッヒ將軍の前に引出されし時、エンミッヒ將軍はみづから進んで握手を求め、

「閣下の防戰はまことに見事であつた。」

歎
譽
胸
劔

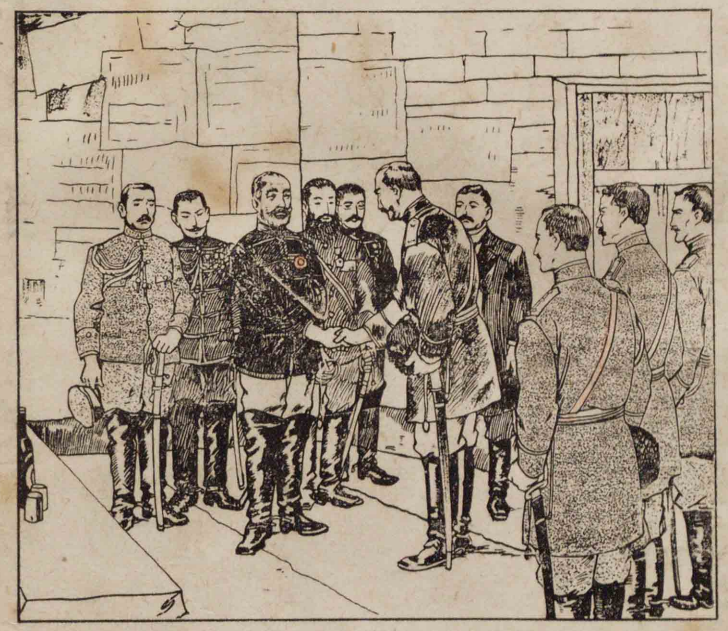
と感歎せるに、レマン將軍は靜かに、
「おほめにあづかつて恐れ入る。しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。」
と答へたり。
やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劔をときて渡さんとするを、エンミッヒ將軍は
「いや、それには及ばん。閣下の劔は軍人の魂として少しも名譽をきずつけなかつた。」

強止
師
彈丸
屋

と、強ひて之をおし止めたり。
レマン將軍の目には涙ありき。

第十　水師營の會見

旅順開城約成りて、
敵の將軍ステッセル
乃木大將と會見の
所はいづこ、水師營。
庭に一本なつめの木、
彈丸あともいちじるく、
くづれ殘れる民屋に、



いまぞ相見る二將軍。

謝備正

乃木大將はおごそかに、
御めぐみ深き大君の
大みことのりつたふれば、
彼かしこみて謝しまつる。
昨日の敵は今日の友、
語る言葉もうちとけて、
我はたゝへつ、彼の防備。
彼はたゝへつ、我が武勇。
かたち正していひ出でぬ、
『此の方面の戰鬪(とう)に

二子をうしなひ給ひつる
閣下の心如何にぞ。』と。
『二人の我が子それぐに、
死所を得たるを喜べり。
これぞ武門の面目。』と、
大將答力あり。
兩將晝食共にして、
なほもつきせぬ物語。
『我に愛する良馬あり。
今日の記念に獻ずべし。』

目

厚

受領

『厚意謝するに餘りあり。
軍のおきてにしたがひて、
他日我が手に受領せば、
長くいたはり養はん。』
『さらば』と、握手ねんごろに、
別れて行くや右左。
砲音たえし砲臺に
ひらめき立てり、日の御旗。

第十一　物ノ價

飲料水ニ不自由ナキ土地ニアリテハ、金錢ヲツヒ

然價

ヤシテ、水ヲ買フナドトイフハ、思ヒモヨラヌ事ナリ。然レドモ飲料水ノ得ガタキ所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。同ジ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

得ガタキ物ニテモ、有用ナラヌ物ハ價ナシ。例ヘバコヽニ一ツノ石アリトセヨ。ソレガ如何ニマレニシテ、タヤスク得ラレザル物ナリトモ、用ヒヤウナケレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價アルコトナシ。

カクノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラレザルトニヨルナリ。

又コヽニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、爭ヒテ高キ價ヲツク。カクテ價ハ次第ニ高クナリテ、馬ハ最モ高キ價ヲツケタル人ノ物トナル。

之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タヾ一人ナルトキハ、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、爭

需要
供給

ヒテ價ヲ下グ。カクテ價ハ次第ニ安クナリテ、最モ價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬ヲ賣ルコトトナル。カクノ如ク、品物多クシテ、之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安クナリ、品物少クシテ、之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高クナル。スナハチ物ノ價ノ高下ハ、主トシテ需要ト供給トノ關係ニヨルナリ。

第十二　弟から兄へ

にいさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。「今年ほど水の都合のよかつた事はない」と、おとうさんが喜んでいらつしやいます。あの降りつゞいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出來ました。

一昨日

一昨日海軍のにいさんが、休暇でお歸りになつたので、おとなりからの手つだひと合はせて、植手が八人になつて、にぎやかでした。私は苗くばりをして、「お前もたしかに半人前だ」と、おかあさんにほめられました。

昨夜

田植がすんだので、昨夜は手つだひの人

たちを呼んで、ごちそうをしました。其の時おとうさんがにいさんと「世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝だ。米が出來るのも、麥が取れるのも、土といふありがたいものが、めい〳〵の骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。うち中が丈夫で、仲よくかせぐ、こんな仕合なことはない。」と話していらつしやいました。おとうさんは今朝も「もう二番茶もつまなくてはならない。それがすむとやがて

米

夏蠶の上りだ。にいさんたちの分もわたしが働くのだ。」とおつしやつて、大そう元氣です。うちの事はすべて御安心下さい。」夏休も近くなりました。みんなでにいさんのお歸を待つてをります。

六月十日　　要吉

兄上様

第十三　老社長

僕は今日學校から歸るとすぐ、おとうさんのお手紙を持つて、精米會社へお使に行つて來ました。會

社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、四五人の若い人々がぬかだらけになつて働いてゐました。社長さんは餘程の年よりらしいが、にこにこしてゐる元氣な方です。僕は何となくえらさうな人だと思ひました。

お返事をお渡しした後で、おとうさんに

「あの精米會社の社長さんはえらい方なんでせう。」

と言ふと、おとうさんは

「お前にもさう見えるかね。」

國九

照

とおつしやつて、あの方の小さい時分からのお話をして下さいました。

「あの社長さんはもと上方の人で、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。主人の家が大きな醤油屋だつたので、始は近在の小賣店へ、毎日々々、降つても照つても、おろしに歩き廻つたものださうだが、其のつらさはとてもお前たちにわかるものではない。十年餘りもしんばうして、やう〳〵一人前の番頭になり、それから又長い間忠實に勤め

貯資

繁昌

推

て、三十ぐらゐの時、年來の貯金と主人からもらつた金を資本にして、小さい米屋を始めた。

さて商賣を始めると、あの人ならといふ信用はあるし、それにわき目もふらず働くので、店はだんだん繁昌して、十年もたゝぬ中に、町でも屈指の財産家となつた。さうして人々に推されて、町の銀行の頭取になつた。それはわたしの十五六の時分だつたらう。うちのおぢいさんはあの人とは前から友だちだつたので、よく其の話をなすつては、大へんほめていらつしやつたものだ。」

擔輕

「ほんたうにえらい人ですね。」

「いや、これから先があの人のほんたうにえらい所だ。」

おとうさんはすぐ言葉をついで、

「社長さんが銀行の頭取になつてからちやうど十年目の秋、いろ〳〵の手違から、銀行が破産しなければならぬ事になつた。世間にはこんな場合になるたけ自分の負擔を輕くしようとする者もあるが、あの人は反對に、少しでも他人の負擔を輕くしようとして、自分の財産を殘らず差

出した。さうして全く無一物になつて、親子三人町外れの裏長屋に移つてしまつた。けれども社長さんは、それを少しも苦にしないで、『なあに、もう一度出直すのです。』といつて、笑つてゐた。

社長さんは早速荷車を一臺借りて來て、醤油のはかり賣を始めた。町の人々は之を見かねて、『そんな事までなさらなくても。』といつて、資本を出さうとする者もあつたが、社長さんは、『自分の力でやれる所までやつてみます。』といつて、夜を日についで働いた。人々の同情は集つてゐるし、商

空

賣の仕方は十分心得てゐるので、毎朝引いて出た荷が、夕方には必ず空になるといふ景氣。それにあの人の事だから、決してあせらず、一軒二軒と得意先をまして行つて、後には表通へ店を出すまでになつた。それからだん〳〵商賣の手を廣げて、六十五六の時にはもう餘程の財産が出來た。そこで間もなく片手間に精米所を始め、追追に大きくして、あんなりつぱな會社にしたのだ。全くあんな人は珍しい。』

とお話しになりました。僕は今日其のえらい社長

會

さんに會つて來たのだと思ふと、何となくうれしい氣がしました。

第十四　麥打

一

束

さん〳〵、さん〳〵。

今日は天氣がよいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。

正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。後には麥の束が山と積んであるそれをてんでに一束づつ取つては、兩手で根

莖穗散

本の所をつかんで、打臺にぱた〳〵とたゝきつけると、莖の先についてゐる穗が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。束を廻して又たゝき、穗が殘らず落ちてしまふと、束をむしろの向ふにぽいと投げて、又新しい束を取る。後の山がだんだん低くなるにつれて、前の麥藁（わら）の山が見る〳〵高くなる。

「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」

あみ笠をかぶつた父がふり向くと、母もすげ笠をそちらへ向けて、

「ぼんたうにさうですね。おかげで今日中には大がいかたづきます。」

と言ひながら、正一を見てにつこりした。

仕事は水入らずの三人の手で、ずん〳〵はかどつて行く。何所からかにぎやかな歌が聞えて來る。

二

庭に敷きつめたむしろの上に、黄色い麥の穂が一面に廣げられて、まぶしいやうな夏の日にかゞやいてゐる。正一のうちの人たちに手つだひもまじつて、七八人の男や女が向ひ合つて、片足をふみ出

し、掛聲を合はせながら、ばたんばたんと殼竿で麥を打つてゐる。のぎが飛ぶ、穂がはねる。ふり上げた棒の先が、強い日光にきらり〳〵と光る。

赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、へうきんな五平ぢいさんが、時時へんな掛聲をして皆を笑はせる。分家の金次叔父さん

汗　は、軍隊歸りのたくましい腕で、すとん〳〵と打下す。
續　男も女もひたひの汗を、ほこりだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。
花　日はかん〳〵と照つてゐる。庭のすみにはほうせん花が眞赤に咲いてゐる。雞が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。
逃

第十五　軍艦生活の朝

橋直　東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だん〳〵にあらはれて來る。艦橋には當直將校の姿が見え、其のそばに

銃　は、望遠鏡を持つた信號兵が遠くを見張つてゐる。舷門には、銃を手にした番兵が近くを警戒してゐる。千數百人の乘員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。艦内は深山のやうな靜かさである。

起床　人の顏がやつと見分けられるやうになつた頃、時鐘番兵がこと〳〵と艦橋の下へ來て、「總員起し五分前」と當直將校に報告する。軍艦の起床時間は、夏

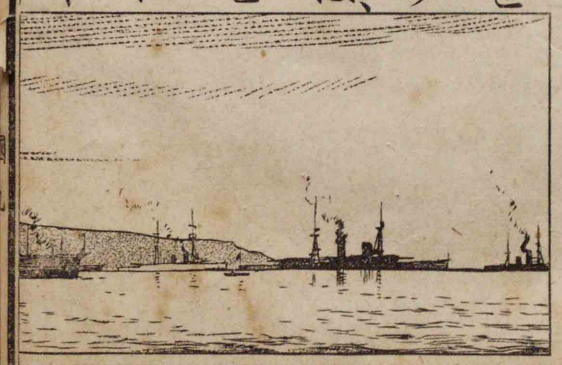
傳令　は五時、冬は六時である。間もなく甲板士官や傳令員が起きて來る。副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空をながめる。

破床

やがて午前五時の鐘が鳴ると、當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

「總員起し。」

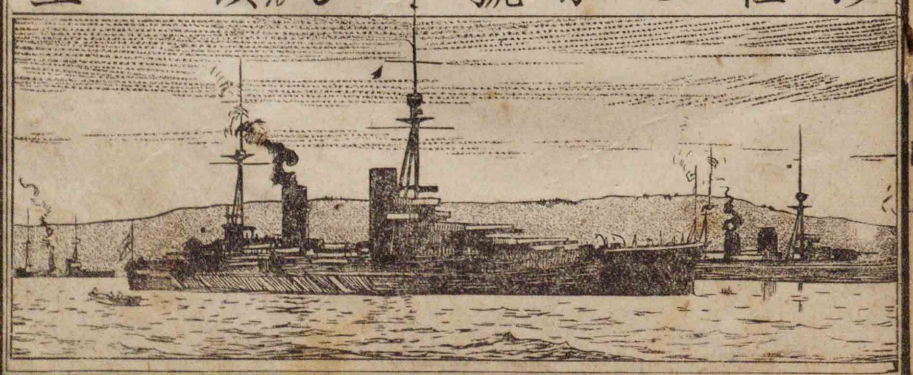
此の號令で、朝の靜かさが忽ち破られ、起床ラッパは勇ましくひゞき、傳令員は號笛を吹きながら、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬつて行く。すると乘員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくゝる。これから號令が雨のやうに下る。それにつれて、つり床は正しく



定　規律　休

一定の場所に納められる、すべての窓や出入口は開かれる。これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのとかはりはないが、千數百人の乘員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、如何にも目ざましい。數分の内に艦内はすつかり整頓する。

そこで五分間の休けいがあつて、上



特

甲板洗となる。上甲板洗は水兵の受持で、先づ

「兩舷直、整列。」

のラツパが一きは高くひゞき渡ると、はだしのまの水兵が後甲板にはせ集つて、ずらりと整列する。兩舷直といふのは、特別の務のあるものをのぞいた外の水兵のことである。間もなく當直將校から威勢のよい號令がかゝる。

「上甲板洗ひ方。」

水兵はくもの子を散らすやうに八方へ散つて、かひがひしくズボンと袖をまくり上げ、身輕な姿と

煙草

なつて分隊毎に甲板洗を始める。甲板洗はいかにも勇ましく面白いものである。下士官が、甲板の吐水口からふき出る海水を、桶に汲んではどんくと流すと、ブラシを持つた數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。其の樣は、まるで雨後の蛙がむらがり飛んでゐるやうである。

甲板洗がすむと、

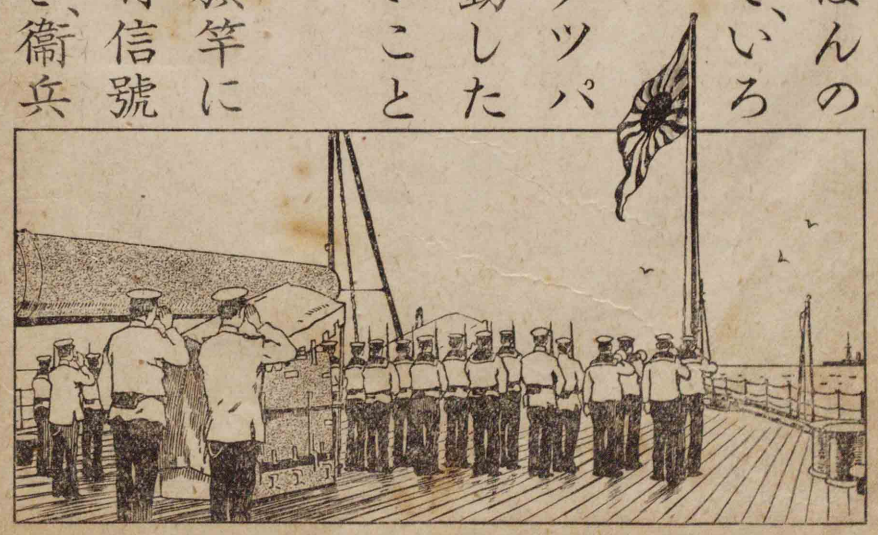
「總員顏洗へ。」「煙草ぼん出せ。」

の令が下る。そこで始めて乘員は顏を洗ふ。其の中に上陸員が歸艦する。其所此所で「お早う」が言ひか

尾旗衛

はされる。火縄一本の煙草ぼんのまはりには、人の山が出來て、いろいろの話が出る。笑ひ聲も起る。間もなく食事用意のラッパがひゞく。一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。此の時信號兵は「君が代」のラッパを吹き、衛兵



敬

驛

隊は捧銃の敬禮を行ひ、艦長をはじめ乘員一同は、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬禮する。朝日にかゞやく軍艦旗が、海風にひらめきながらしづ〳〵と上つて行く樣は、實におごそかなものである。軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乘員は、これから訓練に取掛るのである。

第十六　東京から青森まで

午後六時、叔父さんと一所に、上野驛から青森行の列車に乘つた。ずゐ分こんでゐたが、みんながゆづり合つてくれたので、二人とも腰を掛けることが

出來た。汽車が進むにつれて、關東平野はだん〳〵夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。

「宇都宮（うつのみや）」と驛夫の呼ぶ聲に、何時かおかあさんと日光見物に來た時のことを思ひ出した。まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、もう八時半であつた。間もなく西那須野（にしなすの）に着いた。叔父さんが

「此の邊が有名な那須野が原だ。昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出來てゐる。紅葉と温泉で名高い塩原（しほばら）へ行くには、此所で下りるのだ。」

紅葉
泉

果

とおつしやつた。私は眠くなつたので、それから直にねてしまつた。

目がさめると、もう夜が明けてゐて、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

「叔父さん、此所は何所ですか。」

と聞くと、

「仙臺（せんだい）はとつくに過ぎて、やがて一關（いちのせき）だ。よくねたね。」

とおつしやつた。窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。顔を洗つて來

過　街

て、ビスケットを食べながら、私がゆめの中に通過した驛々のお話をうかゞつた。

「白河を通つたのは昨夜の十一時前であつた。昔能因（のういん）といふ人が、

『都をば、かすみと共に立ちしかど、
秋風ぞ吹く、白河の關』

とよんだのは其所のことで、此の關所は濱街道の勿來（なこそ）の關と共に、有名なものであつた。」

叔父さんはなほ言葉を續けて、

「仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乘つた人もあつた。仙臺は東北第一の都會で、大學も高等學校もある。昔は竹に雀の紋所で名高い仙臺樣の城下であつた。」

「松島は。」

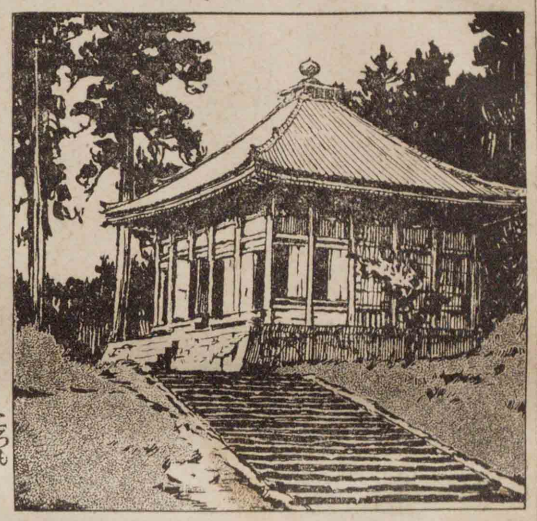
「仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。歸りに見物して行かう。」

一關で辨當を買つた。次の平泉（ひらいづみ）といふ驛を出て間もなく、叔父さんは近く左に見える山を指さして、

「あの上に名高い金色堂（こんじき）がある。光堂（ひかり）ともいつて、昔は金光りに光りかゞやいてゐたさうだ。八百

辨

傳



年前の建物で、今も鞘堂の中に其のまゝ保存されてゐる。義經の居た高館のあとも右手に見えたはずだが、もう通過してしまつた。辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。」

とおつしやつた。其の中に汽車は山の間を出て、大きな川の見える所に出た。

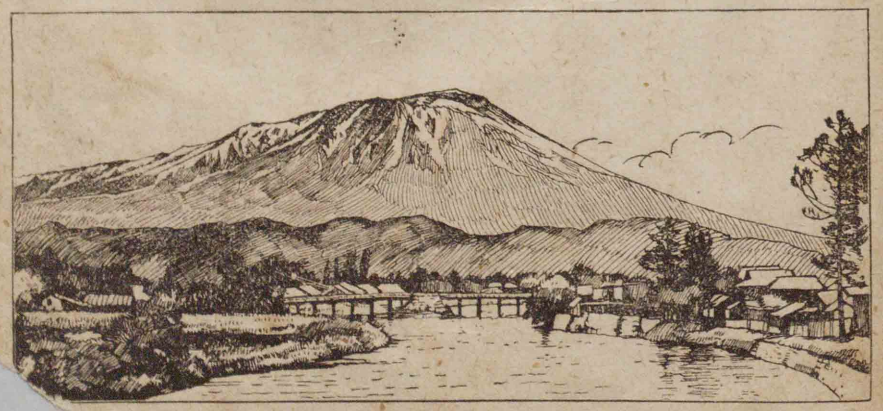
「あれが北上川だ。汽車は此の邊からあの川について、北へ〳〵と走るのだ。」

と教へて下さつた。

午前八時盛岡に着いた。停車場にはいる手前でまた北上川を見たが、此所まで來ると川幅がかなりせまくなつてゐる。

汽車が盛岡を出て少し進むと、遠く左に見えるかくかうのよい山を指さして、

「あれは岩手山だ。南部富士といい



越境原

はれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。あのふもとに有名な小岩井農場があるのだ。」

とおつしやつた。

汽車は野を過ぎ山を越えて進む。北上川はまだをりをり見えるが、いよ〳〵せまくなつて、とう〳〵谷川になつてしまつた。山畑に稗の作つてあるのも珍しく、谷間に白い山ゆりの花のまばらに見えるのも面白い。陸中と陸奥との境にある幾つかのトンネルをくゞると、廣い原野がだん〳〵に開けて來る。此の邊から野邊地あたりまでの間には、所

沼帆

所に放し飼の馬の群れてゐるのが見えた。黒・白・茶色、大小さま〴〵の馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる樣は、實に勇ましい。

野邊地で始めて海が見えた。青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、野や山ばかり見て來た目に殊さらうれしかつた。

「海の向ふに遠く見えるのが下北半島だ。」

と、叔父さんがおつしやつた。

淺蟲近くになると、汽車が海岸を走るので、陸奥灣の風光が手に取るやうに見えた。遠くにはかすか

浴

に津輕半島が横たはり、近くには形のよい島々なども あつて、大そう景色のよい所であつた。叔父さんのお話によると、淺蟲は名高い温泉場で、海水浴も出來るさうだ。

午後二時二十分、汽車は青森に着いた。北海道に渡る人は、停車場に續いた乘船所から汽船に乘るのである。私は叔父さんに連れられて宿に着いた。叔父さんが

「東京から此所までは四百五十六哩もあるのだが、かうたやすく來てみると、そんなに遠い所に

來たやうな氣がしないね。」

とおつしやつた。

第十七　いもほり

五時間目の授業がすむと、先生はにこ〳〵して、

「今日はこれからいもほりをしませう。皆いつものやうに、此所で支度をして、學校園へお集りなさい。」

とおつしやつた。これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だつたので、皆一せいに小をどりして喜んだ。さうして大急ぎで學校道

具をかばんにしまひ、めい〳〵身輕になつて、校舍の後の菜園に集つた。枯れかゝつて一面に黃色になつたじやがいも畑を、午後の日がかん〳〵と照らしてゐる。

當番が農具小屋から、鍬・シヤベルなどいろ〳〵の道具を出して來た。先生も大きな箱を持つて來て、ほつたいもは此の中へ入れるやうにとおつしやつた。皆は一せいにほりにかゝる。僕はわり合にしつかりしてゐる一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。やはらかい黑い土がむく〳〵盛上つたと思ふ

と、四方へくづれる。中からみづ〳〵しい白茶色の玉が、じゆずつなぎになつてころ〳〵と出て來た。大人の握りこぶし程の大きなのもあれば、雀の卵ぐらゐなかはいらしいのもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。となりでは、莖がくきつて引きぬけないのを、星野君が根氣よくほつて、ほつたいもを一つ一つていねいにならべて行く。

あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

往

ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ來て、面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

第十八　石安工場

一

石安工場と筆太に、
小屋根に上げし看板が
往來の人の目につきて、
安ぢいさんを知る知らず、
「あゝ、あの角の石屋か。」と、

刻
文字

常

飾

誰もうなづく工場あり。

二

石碑（ひ）を刻む、文字をほる、
槌（つち）音のみ音かしましき
廣き工場の片すみに、
安ぢいさんはせぐくまり、
常に何をか刻みゐる、
めがねを掛けてはつぴ着て。

三

店に飾れる石燈籠（ろう）、

頭の長き福禄壽、
腹のふくれし布袋和尚、
ぼたんにくるふ唐獅子も、
玉をふくめるこま犬も、
皆ぢいさんののみのあと。

四

ぢいさん今年六十の
坂を越えたる足もとに、
大いなる石横たへて、
なほ怠らずこつ〳〵と、

何をか常に刻みゐる、
めがねを掛けてはつぴ着て。

五

「ぢいさん、今度は何ですか。」
「毘沙門天を刻むのだ。」
「何時頃までに出來ますか。」
「來春まではかゝるだらう。」
「來春までも。」と驚けば、
「來春までは。」とくりかへす。

六

飯

今朝遠足にとく起きて、
石屋の前を通りしに、
廣き工場にたゞ一人、
安ぢいさんは一心に
毘沙門天を刻みゐき、
めがねを掛けてはつぴ着て。

第十九　星の話

寶(宝)

信吉の家にては、夕飯後庭先に涼み臺を出して、家内一同涼みゐたり。月はまだ出でざれども、空よく晴れて、滿天の星は寶石をちりばめたるが如し。

說

信吉は夏休にて歸り居たる兄に向ひて、いろ〳〵と星の說明を求めたり。

位置

「にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。」

變

「さうだ。動かないのだ。しかし地球が廻るために、我々の目には動くやうに見える。どの星かを見おぼえて置いてごらん、寢る頃にはもう位置が變つて見えるから。」

「それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。星が

當

そんなに位置の變るものなら、目當にならないでせう。」

「いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。それに、たくさんの星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、まことに都合がよいのだ。」

「それは何といふ星ですか。」

「北極星（ほくきくせい）といふ星だ。」

「でも、あんなにたくさんある星ですもの、それを

變群線

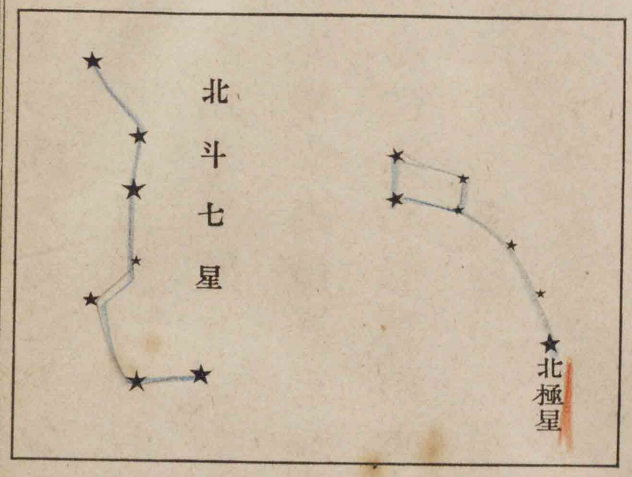
見つけるのに大變でせう。」

「それにはまた都合のよい事がある。何かといふと（と）、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。あれごらん、向ふの杉林の上の所に、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。」

「え、、見えます。」

「あれが北斗七星だ。あの柄（え）でない方の端にある二つの星を結（ゝス）びつけて、其の線を、ひしやくの口

の向いてゐる方へのばして行くと、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、かなり大きい星があるだらう。あれが今話した北極星だ。北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、北極星との關係も常に變らないから、あの星を本にして、すぐに北極星を見つける事が出來る。



「あゝ、あの一番高い杉の眞

迷

上の所にあるのが北極星でせう。」

「さうだ。それにあの星は何時も眞北に居るから、あれを見つけさへすれば、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出來る。」

信吉は感心して、熱心に空を仰ぎゐしが、驚けるやうに聲をあげて、

「にいさん〳〵、あの北極星がひしやくの柄の先になつて、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出來てゐますね。」

「あゝ、よく氣がついたね。並び方が全く似てゐる

熊想像　座　傍姉

だらう。西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、北斗七星と其の近所の星を一しよにして大熊の形を想像して、それ〴〵小熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてごらん。」

信吉は傍なる姉に向ひて、

「ねえさん、どうぞ其の話を聞かせて下さい。」

と頼みたり。

「私も餘程前に讀んだのですから、くはしい事はおぼえてゐませんがね。昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供がありました。おかあさんのカリストは、大そう美しい人だつたので、ジュノーといふ神様がそれをねたんで、とうとうカリストを熊にしてしまひました。其の中に、子供のアルカスはだん〴〵大きくなつて、狩人になりましたが、或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんのカリストだつたのですが、アルカスはそれと知りませ

狩人　變

んから、あぶなく親身の親を射殺すところでした。ところがめぐみ深いジュピターといふ神様が、それを見て、『あゝ、かはいさうだ。あのアルカスに親殺の大罪をかさせてはならぬ。』と、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になさつたのださうです。

「あゝ、面白かつた。おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。にいさん、やつぱりにいさんのおつしやつたやうに、星の位置は變りますね。僕今夜はいろ〳〵の事をおぼえて、ほんたうにうれしかつた。」

信吉は兄と姉とに謝して、樂しく其の夜のゆめに入れり。

第二十　白馬岳

にいさんのお友だちの岡田さんが旅行からお歸りになつたと聞いて、今日にいさんと二人で遊びに行きました。ちやうど岡田さんは四五人のお友だちに、白馬登山のお話をなさつていらつしやる所でした。

白馬岳（だけ）が飛騨（ひだ）山脈中の有名な山だといふ事は知

頂

つてゐましたが、くはしい事は今日始めてうかゞひました。中でも面白かつたのは大雪溪のお話です。

「雪溪は谷を埋めた雪の坂で、ふもとの村から三里ばかり登つた所から始つて、頂上近くまで續いてゐます。幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても

霧散付

には一寸先も見えないやうなことがあります。

登山者はかんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖や鳶口を力に、此の坂を登るのです。眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつめたくなつてしまひます。下山の時には、木の枝などを橇にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。僕も其の通りにして見ましたが、眞白です。雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、時

急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、實に壯快でした。」

お話を聞いて、僕もすべつて見たくなりました。

それから、お花畠のお話も面白うございました。

「お花畠は雪溪を登りつめた所にあります。雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何ともいはれない美しさです。あの雷鳥といふ珍しい鳥も、此のあたりから頂上へ登る途中のはひ

松の間に居るのです。」

と言つて、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見せて下さいました。

お話が頂上のながめに移ると、いよ〳〵はずんで來て、岡田さんは目の前に見てゐるやうな樣子で説明なさるので、僕等も何時の間にか、山の

雄　眼　白　連　競

上に居るやうな氣持になつて聞きました。

「頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。もやの底にかすかに見える越中の平野、日本海の波の上にはるかに浮ぶ能登半島、眼前には杓子岳や鑓岳がぬつとそびえ、遠くには槍岳・穂高岳・乗鞍岳・立山・劔岳・白山など、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。淺間山は煙をなびかせて、東南の空はるかにそびえ、戸隱連山は東北の方に、呼べば答へるばかり近くそばだつてゐます。富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。」

面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、もう夕方になつたので、僕等はおいとまごひをして歸りました。

熟

第二十一　初秋

日本晴のよい天氣。

おかあさんと茄子をもぎに出たついでに、かぼちや畠を見廻ると、此の前まだ少し早いと言つて殘して置いたのが、今日はもう熟しきつたやうな顔

延　誠　隣

をして、へそを日にさらしてゐる。

向ふの畠には、たうのいもが作つてある。黒みがかつた紫色の茎が見事に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよい。其の隣の畠にしやうがが、根ぎはの赤い所を少し土からあらはして、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。山のすその方があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。二百十日を無事

込

に越した田には稲の穂先がもう大分重みを見せてゐる。

たんぼの中程を流れてゐる小川は、いつもより水が多い。蛙がぽかんぽかんと飛込んではすうつと泳いで行く。やがておもだかの茎や芹の葉などにつかまつて、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいでゐるのは、鮒やどぢやうを取るのであらう。空には赤とんぼが幾つともなく飛んでゐる。

「うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿が

甘

すゞなりになつてゐるのが目につく。今年はなり年なのだ。まだ青いが早く甘くなるたちだから、もう直に食べられる。

午後には弟と天神山へきのこ取りに行くのだ。

第二十二　北風號

北風はたけが五尺二寸もある黒馬で、毛はうるしのやうにつや〳〵しく、見るからに強さうな軍馬である。北風の主人は若い騎兵中尉で、たいそう北風をかはいがつて、まるで我が子のやうに大事にしてゐた。或年戰爭が始つたので、北風も外の軍馬

と同じやうに、主人にしたがつて戰地へ向つた。戰地ではいろ〳〵つらい事もあつたが、戰場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。ラツパのひゞきや大砲の音に、北風の心は先づ勇みたつ。やがて「進め」の號令がかゝると、たゞ愉快にたゞ一生けんめいにかけ出す。戰場の光景は實に恐しいものであつたが、北風は自分の信じてゐる中尉が乘つてゐてくれるので、砲彈の雨の中でも、銃劍の林の中でも、びくともせずに勇ましく活動した。しかしとう〳〵恐しい日が來た。或朝の事であつ

た。東の空がほんのりと白む頃、北風は外の軍馬と一所に、露營のテントの前に、列を正して並んだ。兵士たちはめい〳〵馬のそばに立つて、今か〳〵と命令の下るのを待つてゐた。月が西の空にうす白く殘り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。だん〳〵明るくなつて來た。中尉の固く結んだ口もと、するどい目の光、其の樣子がどうも一通りでない。利口な北風はすぐそれに氣がついた。やがてあたりの靜かさを破つて、大砲の音がとゞろき始めた。中尉はひらりと北風にまたがつて、亂れてゐ

たてがみをそろへ、くびすぢを輕くたゝきながら、

「おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。しつかり頼むよ。」

と、まるで人間に言ふやうに言つた。北風は、主人の手がかうしてくびすぢにさはるのが何より好きだつたから、うれしくて、得意さうに頭を高くあげた。やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

「乘馬。」

兵士たちは一せいに馬上の人となつた。馬はどれも皆張りきつて、くつわをかんだり、前がきをしたり、頭をふり上げたりしながら、乘手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

數分の後には、北風はもう列の先頭に立つて進んでゐた。

其の日の戰は果して今までになくはげしかつた。中でも一番目ざましかつたのは最後の襲撃。谷一つへだてた向

ふの岡に、敵の砲兵が放列をしいてゐる。味方は其の正面から眞一文字に進んで行く。

敵彈は前後左右へ雨のやうに落ちて來る。それでも誰一人敵に後を見せる者はない。

やがてもう〳〵と上る白煙の間から、怪獸のやうな大砲と、其のまはりにむらがる人かげが見えて來る。砲口はか

はるがはるいなづまのやうな砲火をはいては、耳もつぶれさうにほえ立ててゐる。人はいよ〳〵勇み、馬はます〳〵はやる。

中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、敵陣が間近になつたのを見て、一だん高く軍刀をふりかざし、いつものはれ〴〵とした聲で、

「そら、もう一息だぞ。襲へ〳〵。」

と叫んだ。ちやうど其の時、敵の砲彈が近くで破れつして、其の破片がぴゆつと北風のたてがみをかすめた。北風は、主人の體がくらの上でぐらつとゆ

れるのを感じた。と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、後からかけて來る味方に追はれて、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。しかし主人をうしなつたと思ふと、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、ゆめからさめたやうにあたりを見廻した。大空には、午後の日が大砲の煙や砂ぼこりにさへぎられて、どんよりとかゞり、地上には、人馬の死がいがあちらにもこちらにも重り合つてゐる。北風は俄におぢけがついた。さうして主人

がこひしくなつて、今來た方へ一散にかけもどつた。

主人の姿を見つけると、靜かに其のそばに立止つた。中尉はあをのけになつて倒れてゐる。北風は、もう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。中尉の手はじつとして動かない。北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、訴へるやうな目付で主人の顔を見下し、左右の耳をそばだててみた。しかし聞えるのはかすかな息づかひばかりであつた。

ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。戰爭なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。さうして之に合はせるやうに、又自分の最愛の主人に味方の勝利を語るやうに、一聲高く天に向つていなゝいた。中尉の顔には滿足らしいゑみが浮んだ。

第二十三　手紙

一

昨日は美しきお話の本御送り下され、誠に有難く存じ候。あの中にて一番面白き

有難候

話をよくおぼえ置き、來週學校にて話し方の時間に話し、同級の人々を驚かさんと樂しみ居り候。

九月二十日　　正男

伯父上様

二

伯父

先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。近き中に頂きに上りたく候に付き、何日頃がよろしく候や、御知らせ下されたく、

猫頂

御願ひ申し上げ候。

九月二十日　　みよ子

伯母上様

三

伯母

拜啓。昨年僕の學校より、君の學校へ御轉任なされ候佐野先生、先頃より御病氣の由承り候。早速御見舞に參上致したく存じ候へども、御住所不明にて困り居り候。若し御承知に候はば、御手數ながら至急御報知下されたく、願ひ上げ候。草々。

啓　任　由　承　住

九月二十日　　下田英太郎

吉野萬吉君

第二十四　水兵の母

明治二十七八年戰役の時であつた。或日我が軍艦高千穗の一水兵が、女手の手紙を讀みながら泣いてゐた。ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、餘りにめゝしいふるまひと思つて、

「こら、どうした。命が惜しくなつたか、妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有樣は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」

と、言葉鋭くしかつた。

水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、

「それは餘りな御言葉です。私には妻も子も有りません。私も日本男子です。何で命を惜しみませうどうぞ之を御覽下さい。」

と言つて、其の手紙を差出した。

大尉はそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。

『聞けば、そなたは豐島沖の海戰にも出ず、又八月十日の威海衛攻撃とやらにも、かく別の働なかりきとのこと。母は如何にも殘念に思ひ候。何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。一命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はずや。村の方々は、朝に夕にいろ〳〵とやさしく御世話下され、一人の子が御國の爲いくさに出でし事なれば、

豐攻撃

恩報

定めて不自由なる事もあらん。何にてもゑんりよなく言へ。』と、親切におほせ下され候。母は其の方々の顏を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。八幡（まん）樣に日參致し候も、そなたがあつぱれなるてがらを立て候やうとの心願（シガン）に候。母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察し下されたく候』。

大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、水兵の手を

願

察

務

握つて、

「わたしが惡かつた。おかあさんの精神は感心の外はない。お前の殘念がるのももつともだ。しかし今の戰爭は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出來ない。將校も兵士も皆一つになつて働かなければならない。總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。おかあさんは『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つてゐられるが、まだ其の折に出會はないのだ。豐島沖の海戰に出なかつたことは、艦中一

雄

同殘念に思つてゐる。しかしこれも仕方がない。其のうちには花々しい戰爭もあるだらう。其の時にはお互に目ざましい働をして、我が高千穗艦の名をあげよう。此のわけをよくおかあさんに言つてあげて、安心なさるやうにするがよい。」

と言聞かせた。

水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮して、につこりと笑つて立去つた。

第二十五　選擧ノ日

道雄ガ今朝起キテミルト、商用デ四國ノ方ヘ旅行

議選擧

シテ牛タ父ガ、夜汽車デ歸ツタトコロデアツタ。一月モカヽルヤウナオ話ダツタノニ、ドウシテコンナニ早クオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞イテミタ。

「オトウサン、御用ハモウスンダノデスカ。」

「イヤ、マダスマナイ。今日午後四時ノ汽車デ又出カケルノダ。」

「ドウシテオ歸リニナツタノデスカ。」

「今日ハ衆議院議員ノ總選擧ダカラ、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノダ。」

補　初豫

「オトウサンハ誰ニ投票ナサルノデス。」

「ソレハ誰ニモ言フベキ事デハナイ。シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツパナ考ヲ持ツテ牛テ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、オトウサンハ最初カラチヤント其ノ人ニキメテ牛タ。今日投票ノ爲ニ歸ツタノモ出發ノ時カラノ豫定ナノダ。」

「ソンナエライ方ナラ、オトウサンガワザ〳〵オ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。」

「イヤ、其ノ人ガ當選スルコトハウタガヒナイガ、

權棄

適

或棄趣

自分ノタフトイ選擧權ヲ棄テルトイフ事ハ、選擧人トシテカリソメニモスベキ事デハナイカラ、カウシテワザ〳〵歸ツテ來タノダ。

當選スルシナイハ別ニシテ、メイ〳〵自分ノ適當ト信ジテヰル人ニ投票スルノガ、ホンタウノ選擧トイフモノダ。世間ニハ、イロ〳〵ノ事情ノ爲ニ、或ハ信用モシテヰナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、ソンナ事ヲスルノハ、選擧ノ趣意ニソムイテヰル。國民トシテ恥ヅベキ事ダ。」

道雄ハ此ノ時、フト學校ノ級長選擧ノ事ヲ思ヒ出シタ。道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選擧ヲスルコトニナツテヰルノデアツタ。道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、自分デ一番適當ダト信ジテヰル中村君ヲ選擧シヨウト決心シタ。

をはり

大正十年十一月三十日印刷
大正十年十二月五日發行
大正十年十二月六日翻刻印刷
大正十年十二月三十日翻刻發行

著作權所有

尋常小學國語讀本卷九
臨時定價金拾四錢

著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地16
日本書籍株式會社

代表者　大倉保五郎

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地
日本書籍株式會社工場

大正十年十二月十五日
文部省檢査濟

發賣所　東京市日本橋區新右衞門町十六番地
株式會社國定教科書共同販賣所